

連載 19

その時チェルノブイリ原発 4 号炉で・・・

(写真集「チェルノブイリの火」より)

チェルノブイリをテーマにした記録文学は、発電所オペレーターたちについて、彼らの行動に対する非難や冷たい差別というまちがった伝説を作り出してしまった。しかし、彼らは死をもたらす原子の息づかいを最初に感じ、自ら英雄的な寛大さを示した人々であった。

核の打撃を最初に受けたのは、中央建屋にいたオペレーター達である。全職員は完全な真っ暗闇の中ですべての配電盤を遮断し、防護カバーで覆った。そうしなければ後から来た消防士達は全員感電で死亡しただろう。彼らは自分たちが異常に高い放射線レベルの中で働いていることを自覚していた。なぜならすでに倦怠、失明、嘔吐など急性放射線障害の諸症状を感じていたから。爆発はたとえ職員による許容範囲内の過失がなかったとしても起こり得た。この事故では、低出力ほど安全と一般に考えられていた主張とは逆に、あらゆる欠陥が表面化した。運転当直主任の O. アキモフは事故当初から 1996 年 5 月 11 日モスクワの病院で完全な死を遂げるまで「私は何もかも正しく行った。どうしてこのようになったのか分からない」と繰り返していた・・・。

(実験終了後原子炉を止めるために) 緊急停止ボタン AZ5 を押した瞬間、発電機指示目盛盤が恐ろしく輝いた。熟練したオペレーター達ですらこの瞬間心臓が押しつぶされそうだった。炉心内部ではすでに崩壊が始まっていたが、まだ爆発はない・・・その瞬間まであと 20 秒・・・。

その時刻、4 号炉に居たのは当直主任の O. アキモフ、上級技師の L. プトノフ、技師長代理の A. デイヤトロフら 14 名である。まさにこの時刻に、原子炉系当直主任の V. ベレボズチエンコが中央建屋の使用済み燃料プールや燃料交換機を見た後、5 コペイカと呼ばれる直径 15m の炉心上部にいた。突然彼はびくっと身震いした。繰り返し激しく起こる水の圧力で 350Kg の燃料カセットが上方に飛び跳ね始めた。まるで 1700 人の人が次々に帽子を上に戻り始めたかのような感じだった。全体がざわめき揺れ始めた。足下ではすでにごうごうたる破壊が進行していた。彼は廊下に飛び出した。その時、主循環ポンプ建屋の向こうでエンジニアの V. ホデムチュクが働いていた。彼はポンプの振動をベレボズチエンコに伝えようとした。その瞬間に爆発が勃発した・・・。ある目撃者の証言によれば、2 回爆発音がしたというが、3 回かそれ以上だっ

たという証言もある。爆風は主循環ポンプの建屋を右へ左へと破壊した。そのうちの一つはホデムチュクの墓になった。

1 時 23 分 58 秒。主任のアキモフは制御盤のそばにいた。給水装置の制御盤のそばには年輩の技師 B. ストリヤチョクが居た。原子炉操作パネルの表示盤は水がない! と知らせていた。アキモフは負荷率の電流計を見た。針はゼロの当たりで振れていた。――爆発した! 彼は心臓が止まりそうだった。しかし再び精神を集中した。――水を補給しなければならない・・・。その瞬間、あらゆる方向から、上からも下からも恐ろしい衝撃があり、途方もない爆発が起こって炉は陥落した。すべての明かりは消えた。起こったのだ。しかし彼らはまだ真実の全容を知らなかった。何とか事態を收拾したいと望んだ。人々はその時、死のゾーンで核の力と闘っていた。タービン建屋の放射能値は毎時 500~1500 レントゲンである。その夜、タービン技師達は偉業を成し遂げた。でなかったら、火災はタービン建屋全体に内側から広がり屋根は落ち、火は他の原子炉建屋に移っただろう。破壊が 4 つの原子炉を襲っていたら何が起こったか、想像もつかない。悲劇の状況の全体を理解した V. ベレボズチエンコも致死線量を受けた。彼はアキモフに云った「原子炉は壊れた。人々を助けなければならない」。彼らは勇気と義務感から罹災した仲間を探しに自ら地獄へと向かった。

ウクライナの大地がホデムチュク、シャシエノク、レレチエンコらを受け取った。モスクワ郊外のムテインシキー墓地にはすでに 20 の墓穴が出現した。オペレーター、電気技師、修理工・・・。その中には女性も二人いる。二人は武装警備隊員だった。その夜当直に当たっていて、一人は 4 号炉向かいの守衛所に、もう一人は使用済み燃料置き場にいた。

運命だろうか。ハリコフの振動調整工の H. ポポフはなぜよりによってその夜発電所に来なければならなかったのか。事故直後、彼は現場を放棄する事も出来た。しかし彼はそうしなかった。彼はタービン技師達に手伝い火災を消し止めた。

死は我々の中からより良い人々を選ぶ、というのがその通りだ。

(ウクライナ語訳 河田いこひ)